

第21回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

【駿台懇話会の目的】

明治大学と連合駿台会が相互の情報交換と親睦を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与することを目的とする。

1. 連合駿台会学術賞

【社会科学】 ^{あきやのりお} 秋谷紀男 (政治経済学部専任教授)

『戦前期日豪通商問題と日豪貿易
—1930年代の日豪羊毛貿易を中心に—』

【人文科学】 ^{いこまながゆき} 居駒永幸 (経営学部専任教授)

『歌の原初へ 宮古島狩俣の神歌と神話』

2. 連合駿台会学術奨励賞

【自然科学】 ^{いしださちこ} 石田祥子 (理工学部助教)

『等角写像と
その円錐殻折紙構造物設計への応用』



連合駿台会報

No.320 平成27年3月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三十三
明治大学「紫紺館」内
電話 (〇三) 三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美創



(左から) 山口政廣会長、秋谷紀男先生、日高憲三理事長、居駒永幸先生、福宮賢一学長、石田祥子先生

連合駿台会学術賞・学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会（一月例会）

平成二十七年最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月二十一日（水）十七時半より、明治大学アカデミーコモン二階「ピクトリーフロア暁の鐘」で開催しました。

山口会長の挨拶に続いて、学術賞二人および学術奨励賞一人の名前およびその選考経過が発表されました。そして受賞者の一人、石田祥子・理工学部助教の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

*

「折紙の数理とその応用」

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、理工学部の石田祥子と申します。このたびは、連合駿台会学術奨励賞という名誉ある賞を賜り、大変嬉しく光栄に存じます。本日は、受賞作品「等角写像とその円錐殻折紙構造物設計への応用」に関連して、折紙とその工学応用についてお話させていただきます。

1 折紙はハイテク!?

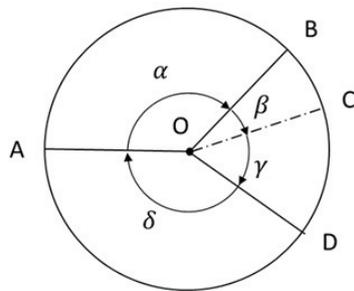
「大学で折紙を研究している」と聴くと不思議に思う方もいらっしゃると思います。折紙は言わずと知れた日本の伝統文化であり娯楽です。しかし、折紙を数学的に解釈すると、最先端技術へと変貌する可能性を秘めているのです。折紙では四角い平らな紙を折って立体に仕上げます。平面から立体に形状を大きく変化させることができます。言い換えれば、大きな立体を小さく平らにたたむことができるのです。この小さくたたむ技術は、例えば宇宙産業に活用されています。ソーラーセイルやソーラーパネルといった大きな構造物はそのままの状態ではロケットに搭載することができませんので、折りたたみの技術を使って小さくたたみ、打ち上げた後、宇宙空間で大きく広げられるのです。他にも、医療用ステントグラフトや形状が変化する翼の設計等、世界中で応用研究が行われています。最も身近な例で言えば、折りたたみ傘も折りたたみ技術の応用例と言えるでしょう。このように、折紙の特性を活かし人の役に立つ技術を生み出す学問を「折紙工学」と呼んでいます。

2 折紙の数理

ここで問題になるのが、「どのようにすれば折りたたむことが出来るのか?」です。図1を例に考えてみましょう。1枚の紙に3本の山折線、1本の谷折線があります。これら

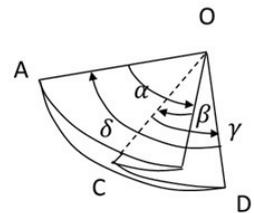
の山折線、1本の谷折線があります。これら

折っていない状態



$$\alpha + \beta + \gamma + \delta = 360^\circ$$

折った状態

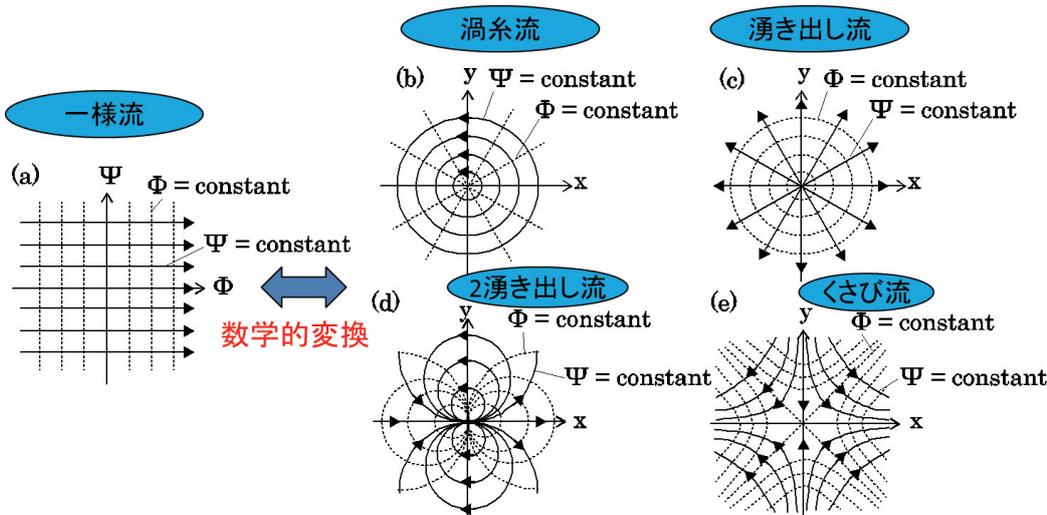


$$\alpha - \beta + \gamma - \delta = 0^\circ$$

$$\alpha + \gamma = 180^\circ$$

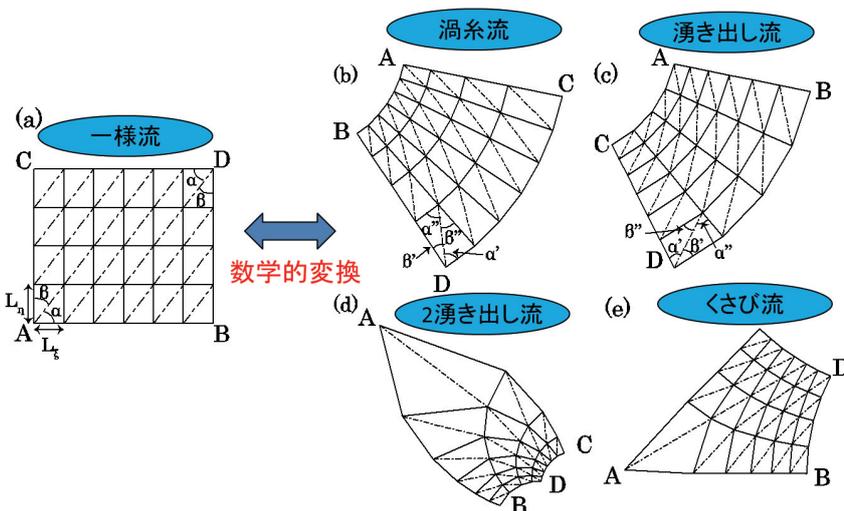
〈図1〉折りたたみに必要な条件

の折線と原点Oの間の角度をそれぞれ α 、 β 、 γ 、 δ とすると、折っていない状態では角度の合計は360度ですから、 $\alpha + \beta + \gamma + \delta = 360$ 度が成り立ちます。折った状態では、これが平らに折りたたまれていくと、折るといふ作業によって角度は行ったり来たりを繰り返しますので、 $\alpha - \beta + \gamma - \delta = 0$



《図2》流体の流れと等角写像変換

$\delta \parallel 0$ 度が成り立ちます。これら2つの式から $\alpha + \gamma \parallel 180$ 度が導かれます。これは、一つとばしの角度の合計が 180 度になることを意味しており、この式を満たすよう



《図3》等角写像変換と折線図

に折線の角度を決定すると、折りたたむことができます(参考文献(1))。厳密には、一般的な立体を折りたたむにはこの条件だけでは不十分なのですが、折線が規則的でシンプルな図形の場合には、この式を用いることができます。

これまでの研究で、数値計算によって折

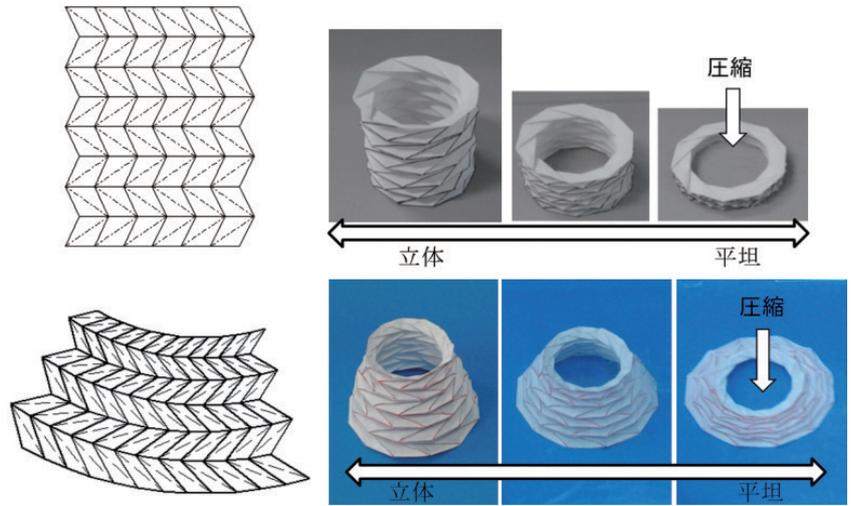
りたたみに必要な条件を満たすように折線図が作成され、円筒、円錐といった筒形状から、自由曲面といった複雑な形状まで、様々な形状の折りたたみが行われてきました。

そこで、私たちは折りたたむことができる形状をこれまで以上に簡単に得る方法はないかと考え、等角写像変換を用いた折線図の作成手法を考案しました。等角写像変換は、流体の流れ等を表現するために用いられています。例えば、図2(a)に示す一様流では流体が左から右へ水平に流れており、流体が高い場所から低い場所へ流れることを考えると、等高線は流れに直交するように垂直に描かれます。一方、図2(c)に示す湧き出し流では、流体が中心から放射線状に湧き出し、等高線は同心円を描きます。これら2つの流れの間には等角写像変換が存在し、湧き出し流のように少し複雑な流れも変換式で簡単な一様流に戻して考えることができるのです。渦系流、2湧き出し流、くさび流のような複雑な流れも同様で、変換式で簡単な一様流に戻って考えることができます。

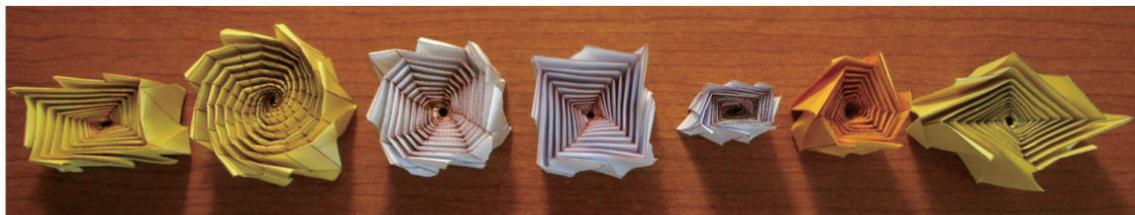
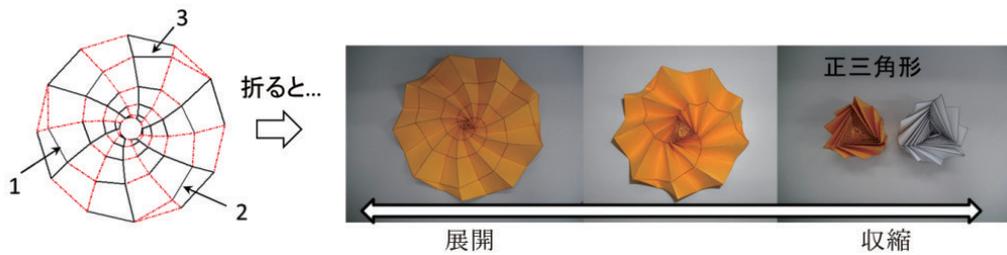
ここで、話を折紙に戻しましょう。折りたたむためには、折りたたみの条件を満たすように折線図を作成する必要があります。図3(a)に示す折線図は折りたたむための円筒の折線図としてよく知られているもので、折りたたみの条件を満たしています。この円筒の折線

図を等角写像で変換すると、複雑な折線図を自動生成することができます。図3(b)~(e)は図2(b)~(e)に示した変換をそれぞれ行ったものです。

従来は、複雑な折線図を直に設計する必要がありましたから、作業はすいぶん楽になります。折りたたむという目的のために折線は直線であればならないため、厳密には



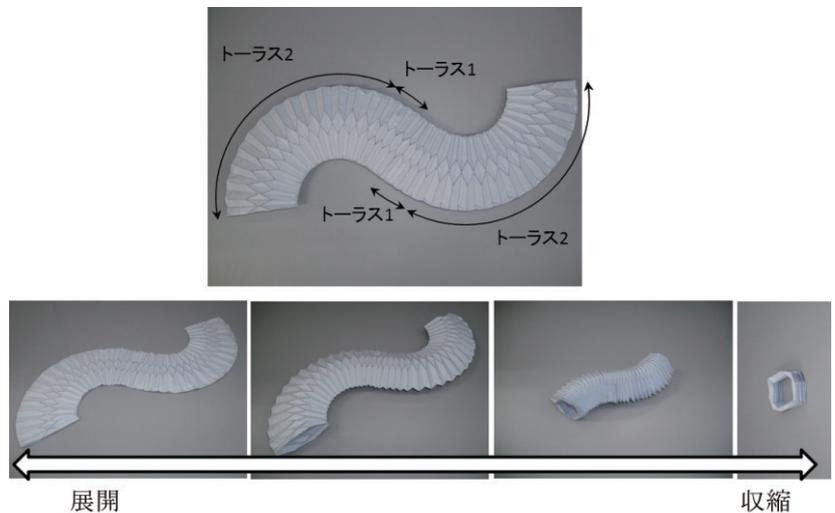
〈図4〉円筒と円錐の折りたたみ(参考文献(2))



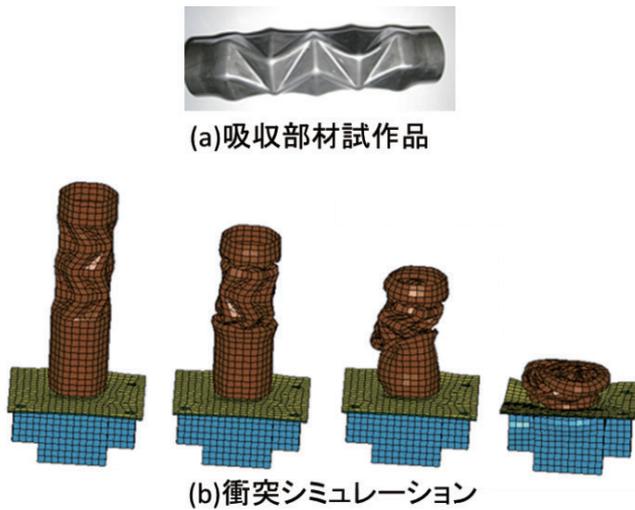
〈図5〉正三角形に巻き取られる折線図とその展開収縮挙動および様々な折紙模型(参考文献(3))

3 いろいろな形を折りたたむ

等角写像変換のうち、渦糸流の変換によって、等角に写像できていないのですが、図形の相似性が満たされる変換(湧き出し流と渦糸流の両変換)においては、変換後も折りたたみの条件を満たすことを証明できますので、問題ありません。



〈図6〉S字状に曲がった筒の折りたたみ(参考文献(4))



〈図7〉折りたためる円筒に基づいた衝撃吸収部材例(参考文献(5))

て得られた折線図例とその模型を紹介し
ます。まず、折りたためる円筒の折線図(図4
上図)を変換して得られるのが、円錐の折線
図(図4下図)です。円筒と同様、円錐も高
さ方向に折りたたむことができます。円錐の
折線図は扇形をしています。変換式の定数
を調整すると、ちょうど中心角が360度と
なる折線図に変換することが出来ます。この
場合は円錐の折線図とはなりません。しかし、

この折線図は、中心周りに巻きつくように折
りたたむことができます。図5の例では、折
線図は3本の等角らせんを持つており、結
果、折りたたむと正三角形になります。4本
のらせんの場合は正方形、16本のらせんの場
合は正十六角形というように、らせんの数に
応じて形状を変えることができます。

ここで紹介した円錐の折りたたみや正多
角形に折りたたまれる折線図はこれまでの研
究でも得られていました。しかし、等角写像
を使った手法によって新たに得られた形状が
あります。それは、長方形やひし形のように
正多角形以外の形に折りたたまれるもので
す。これらの形は、らせんの間隔を不等分に
したり、角度に変化をつけることによって得
られました。等角写像による手法では、複雑
な折線図を直に考えるのではなく、簡単な折
線図に一旦戻って考えますので、このような
新しい形を生み出し易くなるのです。これら
の形状は収納スペースの大きさや形、その他
カスタマーニーズに合わせて、折りたたみ後
の形状を変えることができるので、様々な用
途に応用できると考えています。

次に、湧き出し流の変換によって得られ
る曲がった筒の折線図を紹介します。曲がっ
た筒の場合、筒の曲率によって非常に多くの
変数を取り扱わなければいけないと考えるか
もしれません。しかし等角写像による手法に

より、ごく限られた設計変数で折線の規則性
を崩さずに曲がった筒を折りたためることが
示されました。例えば、図6のように2種類
の筒(トールラス1とトールラス2)をつなぎ合
わせて、S字状の筒を折りたたむことができ
るのです。

4 応用を考える(明治大学の折紙工学)

折紙の数理に基づいた折りたためる形の
工学応用は世界中で行われていますが、ここ
では明治大学で行われている研究を2つ紹介
したいと思います。

まずひとつ目は、小さく潰れて人命を救う
衝撃吸収部材の設計です。従来の自動車用衝
撃吸収部材は簡単に言うと、円筒型もしくは
角筒型をしています。自動車が正面衝突した
時、自動車のフロントに置かれているこの部
材が潰れて衝撃を吸収し、乗客のクッション
になってくれます。しかし、従来の形状で
は、衝突の瞬間に非常に大きな衝撃が生じ、
乗客に致命的なダメージを与える危険性があ
ります。そこで、折線付きの鋼製の衝撃吸収
材(図7(a))を設計しました。この吸収材は
折りたたまれるように潰れるので、従来形状
に比べ、初期荷重を低く抑えることができる
のです。図7(b)にこの衝撃吸収材が潰れる様
子をシミュレーションしたものを示します。
実用化に向け、研究が進められています。

ふたつ目の例は、振動を伝えない、効率の良い防振機構の設計です。自動車のサスペンションを想像して頂きたいのですが、サスペンションはばねの役割をしており、路面の凹凸によって加振されると、ばねを介して振動が乗客に伝わり、乗り心地が悪くなります。これまでに振動を遮断する技術としてアクティブ制御等が研究されてきましたが、折りたためる円筒(図4)は双安定なばねであるため、従来のばねの代わりにこの円筒を用いると、今までは異なる方法で振動を遮断できることが数値シミュレーションにより明らかになりました(参考文献(6))。現在は、この防振器の試作を行い、防振性能を評価するための測定を行っています。

おわりに

今日ご紹介した等角写像による折線図の作成手法によって、様々な折りたためる形を生み出すことができました。これは、ただ多様な形が折りたためるようになったと言っただけではありません。折線のパターンを変えると構造は全く異なる特性を持つので、工学応用の幅が広がったと言うことができます。折紙から得られたアイデアで最先端技術を創造する折紙工学が今後ますます発展していくよう、研究に邁進していく所存です。

ご清聴ありがとうございました。

【参考文献】

- (1) Nojima, Structure with folding lines, folding line forming mold, and folding line forming method, Patent No.WO 2001081821 A1
- (2) 石田、野島、亀井、萩原、等角写像とその円錐殻折紙構造物設計への応用、日本応用数学会論文誌、Vol.22, No.4, pp.301~318
- (3) 石田、野島、萩原、等角写像の折紙への応用(巻き取り可能な円形膜作成法)、日本機械学会論文集C編、Vol.79, No.801, pp.1561~1569
- (4) 石田、野島、萩原、等角写像を利用した折り畳み可能な湾曲した筒型構造物設計法、日本応用数学会論文誌、Vol.24, No.1, pp.43~58
- (5) 萩原、山本、陶、野島、反転らせん型モデルを用いた円筒形折り紙構造の圧潰変形特性の最適化検討、日本機械学会論文集A編、Vol.70, No.689, pp.36~42
- (6) 石田、内田、萩原、折り畳み可能な構造の非線形ばね特性を利用した防振機構、日本機械学会論文集、Vol.80, No.820, p.DR0384

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



柳内 光子
やない みつこ
平成二十六年・ガバナンス研究科卒
山一興産(株)
代表取締役社長
千葉県習志野市在住



井上 貴之
いのうえ たかゆき
平成七年・政経学部卒
(株)カーセブン・インベロプメント
代表取締役社長
東京都世田谷区在住



中野 晴啓
なかの はるひろ
昭和六十二年・商学部卒
セゾン投信(株)
代表取締役社長
東京都文京区在住



阿部 了
あべ さとる
昭和五十八年・商学部卒
(株)ヌーヴ・エイ
代表取締役社長
東京都江戸川区在住

◆ 明大ニュース

● 二〇一五年度志願者が九年連続十万人超、前年度上回る情勢

明治大学の二〇一五年度入学試験は、三月四日に出願締切となる「大学入試センター試験利用入試（後期日程）」を残して試験日程を終えた。特別・推薦入試を除く一般入試の志願者数は二月十日現在で十万五千二百七十三人となり、九年連続で十万人の万台を超えた。前年度の志願者数を上回ることも、確かな情勢となっている。

● 立体的な肝臓組織の作製に成功

理工学部応用化学科の相澤守教授はこのほど、東京慈恵会医科大学の松浦知和教授との共同研究により、立体的な肝臓組織の作製技術を開発した。細かい穴が多数開いた状態に加工したアパタイト（燐灰石）骨や歯の主成分）を足場材料とし、そこに肝臓の細胞を培養して三次元組織を構築するもの。マウスへの移植でも成果が確認されており、相澤教授らは十年後の実用化や、他臓器も含めた再生医療への応用を目指している。

● 表層メタンハイドレート・フォーラム

二〇一四年の調査・研究成果を発表

明治大学ガスハイドレート研究所は一月三

十日、(独)産業技術総合研究所との共催で、「表層メタンハイドレート・フォーラム二〇一四―資源量評価・二年目の成果―」を、駿河台キャンパス・グローバルホールで開催。企業関係者など二百人以上が来場した。

メタンハイドレートは、メタンやエタンなどの炭化水素ガスと水分子がつくる氷状の固体物質。点火すると燃焼することから「燃える氷」とも呼ばれ、新たなエネルギー資源として注目される。ガスハイドレート研究所は産業技術総合研究所と協力し、経済産業省のメタンハイドレート開発促進事業の一環として、日本海海底の表層付近に分布するメタンハイドレートの調査・研究を進めている。

● 明大スポーツ新聞部

「東西九大学新聞コンテスト」で最優秀賞

体育会明大スポーツ新聞部は、このほど開催された「東西九大学新聞コンテスト」（東京五大学新聞連盟主催、朝日新聞社・日刊スポーツ新聞社特別後援）で見事、最優秀賞を受賞した。

過去三回は早稲田、慶應義塾、立教、法政、明治による「東京五大学新聞コンテスト」だったが、四回目となる今回から、関西、関西学院、同志社、立命館の関西四大学（関関同立）が新たに参加。明大スポーツ新聞部は、記事・写真いずれにおいてもクオリ

ティの高さを評価され、第三回に続き、二年連続の最優秀賞受賞となった。

● 五十人の教員から社会への提言

広報冊子「M's Opinion」を発行

明治大学はこのほど、幅広い分野で最先端の研究に取り組む本学教員五十人の、時事問題に対する提言をまとめた広報冊子「M's Opinion（エムズ・オピニオン）」―明治大学発、社会への提言―を発行した。

少子化、地方再生、アベノミクス、環境問題など、社会的関心の高いテーマについて、各分野の専門家である教員の意見を「社会への提言」として掲載している。

大学の知を実社会の多様な問題の解決に役立てたいとの思いから、明治大学のブランディングサイト「Mejinnet（メイジネット）」の企画ページ「M's Opinion（エムズ・オピニオン）」を再編集し、計百十六ページの冊子に取りまとめた。

● スポーツ奨励奨学金

さらなる活躍や、文武両道に期待

スポーツで卓越した成績を収めた学生に給付する「明治大学スポーツ奨励奨学金」の二〇一四年度採用者がこのほど決定し、体育会三十二部・百六十八人に交付された。

この奨学金は、スポーツと学業の両立を

促し、本学のスポーツ活動の高度化・活性化を推進することを目的に、体育会各部の所属学生に与えられるもの。優れた競技成績や「文武両道」の実績があり、かつ経済的支援を必要とすることが採用条件となる。給付金額は授業料相当額または二分の一相当額。

●商学部 創設一〇周年特別企画

「四大学交流シンポジウム」

商学部は昨年十二月十三日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンにて、商学部創設一〇周年特別企画となる四大学交流シンポジウム「学部の個性と連携―二十一世紀のビジネス教育のあり方をめぐって―」を開催。パネリストに横井勝彦商学部長、関西学院大の寺地孝之商学部長、青山学院大の田中正郎経営学部長、立教大の石川淳経営学部長を迎え、四大学の学生や高校生ら約二百人が参加した。

シンポジウムは三部構成で行われ、第一部では、各学部長がそれぞれの学部（大学の成り立ちに触れながら、グローバル化や、学生の自主性を引き出すアクティブラーニングの取り組みなどを紹介した。

●校友会

「明治大学発祥の地・記念碑祭」を開催

校友会東京都南部支部は一月十日、明治

大学発祥の地である東京都千代田区有楽町にて「明治大学発祥の地・記念碑祭」を開催。日高憲三理事長、福宮賢一学長をはじめ、大学役員や校友ら約百人が出席し、明大一三四年の歩みを振り返るとともに、未来への飛躍に向け思いを新たにしました。

●信州大学との連携協定に基づく講演会

「信州の黒曜石研究のいま」をテーマに

明治大学と信州大学などは昨年十二月七日、両大学間の連携協定に基づき、「信州の黒曜石研究のいま」と題する第一回講演会を諏訪市文化センター（長野県諏訪市）で開催。講演会は伊藤光副学長（総合政策担当）らの主催者あいさつから始まり、続いて、本学の黒曜石研究センターの小野昭センター長（研究・知財戦略機構特任教授）が「信州の黒曜石研究と世界の黒曜石」という演題のもと、

地域・日本・世界という切り口で、黒曜石研究の現状と今後要請される事項について講演した。

●東京を緑豊かで持続可能な環境都市に

「TOKYO GREEN 2020」推進会議

キックオフフォーラムを開催

二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックを契機に、東京を緑豊かで多様性のある持続可能な環境都市にすることを目的とした

「TOKYO GREEN 2020」推進会議のキックオフフォーラムが昨年十一月二十五日、駿河台キャンパス・リバティホールで開催された。主催する「TOKYO GREEN 2020」推進会議の会長で、公益財団法人都市緑化機構理事長を務める輿水肇教授（農学部）が基調講演に登壇し、「オリンピック・パラリンピック開催都市に期待される緑化」をテーマに、民有地緑化の動向や、五輪会場と都市緑化プラザなどについて説明。主要会場をレガシー（遺産）として将来に継承するとともに、この機会に緑豊かな東京を世界へ発信することの重要性を訴えた。

●和泉キャンパスで「バリアフリー映画祭」

明大生十人を中心とするバリアフリー映画祭実行委員会「Change Your Heart」は昨年十二月二十日、「バリアフリー映画祭」を和泉キャンパス・図書館ホールにて開催した。視覚障がいの方や介助者、大学生など約九十人と盲導犬六頭が集い、場面を音声で解説するガイド付きの映画を鑑賞。上映終了後には、お茶を飲みながらの交流も楽しんだ。

●世界に広がる協定校

四十四カ国・地域二百四十七大学と協定

明治大学は、リレハンメル大学と大学間協力協定を、ロッテルダム応用科学大学ロッ

テルダム・ビジネススクール、東フィンランド大学社会科学・ビジネス学部、ペトラクリスチャン大学、ヌエバ・ビスカヤ州立大学農学部と部局間協力協定を新たに締結した。協定校は四十四の国と地域、二百四十七大学となった（二月十八日現在）。

●政治経済学部

新たな交換留学プログラムを開始

政治経済学部は桜美林大学とともに、ロツテルダム応用科学大学ロツテルダムビジネススクール（RBS）、東フィンランド大学社会科学・ビジネス学部（UEF）と連携し、ビジネス学や経済学を中心とした大学での学びと、現地企業でのインターンシップや株式会社設立体験などを行う四大学間交換留学プログラムを、二〇一五年度より開始する。

ロツテルダム応用科学大学とのプログラムでは、現地企業でのインターンシップの機会を提供。さらに、学生がオランダで株式会社を設立して留学期間中に会社を運営し、留学終了時に解散させるという実践的な機会も与えられる。

東フィンランド大学とのプログラムでは、現地中小企業を招いてのセールスを中心とした講義や、インターンシップの機会などを学生に提供する。

●文学部

キエフ国立大学・コマレンコ准教授

特別講演会「ウクライナ：長く、ねじれた、ヨーロッパへの道」

文学部は一月十四日、キエフ国立大学（ウクライナ）歴史学部副学部長のオレクサンドル・コマレンコ准教授の特別講演会「ウクライナ：長く、ねじれた、ヨーロッパへの道」を駿河台キャンパス・グローバルホールで実施した。

キエフ国立大学との交流は、本学黒耀石研究センター（長野県長和町、センター長：小野昭研究・知財戦略機構特任教授）が二〇一三年に同大学とカルパチアの黒耀石の共同調査を行ったことを契機にスタート。二〇一四年四月には本学と大学間協定を締結し、黒耀石研究や考古学研究などを軸とした協力関係を築いている。この講演会は昨年、小野特任教授が同大学で考古学の講演と講義を行ったことへの返礼の招聘として実現したものだ。

●国際日本学部

世界有数の観光地・ハワイで

ホスピタリティを学ぶ

国際日本学部は二〇一五年度より、ハワイ大学マノア校、ならびにハワイ州のホスピタリティ関連企業（観光・旅行業など）と提携し、ツーリズムなどを中心とした大学での

学びと、インターンシップ経験の双方を重視した新たな留学プログラムを開始する。初年度は二十人を派遣予定。

このプログラムでは、八月の約三週間、ハワイ大学マノア校で語学集中講義などを受講後、同大学の秋学期にあたる八月末～十二月中旬に、インターンシップに向けた基礎として、同大学の学生と共にホスピタリティ関連科目を中心とした講義を受講。

●OB市長

▽愛知県弥富市長（無投票当選）

服部彰文氏（無所属③、一九七一年商学部卒・六十七歳）

●OB社長

▽片倉工業（繊維製品） 〓佐野公哉氏（一九

七七年農学部卒・五十九歳）

▽東京精密（精密機器） 〓吉田均氏（一九八三年工学部卒・五十五歳）

●連合父母会文学賞

「阿久悠作詞賞」大賞に木村さん（商1）

第六回連合父母会文学賞の表彰式が二月十九日、駿河台キャンパス・紫紺館で開催され、「阿久悠作詞賞」大賞に木村匠さん（商1）が選ばれた。また、同作詞賞ならびに「倉橋由美子文芸賞」の佳作を各三人が受賞

した。同文学賞は、学生の意欲的な課外活動を奨励しようと、連合父母会の後援を受けて二〇〇九年に設立。故倉橋由美子氏（作家・一九六〇年文卒）の名を冠した文芸賞と、故阿久悠氏（作詞家・一九五九年文卒）の名を冠した作詞賞の二部門があり、明大生を対象に作品を募集している。

今回は倉橋由美子文芸賞に二十六作品、阿久悠作詞賞に七十五作品の応募があり、文芸賞は中村和恵法学部教授（著作者）、越川芳明文学部教授（翻訳家・著述家）、且敬介国際日本学部教授（作家・翻訳家）の三人が、作詞賞はプロデューサーの飯田久彦氏が選者を務めた。

●五紫紺会に会旗を授与

海外紫紺会は計十六団体に

明治大学はこのほど、校友会で設置が承認されたサイゴン（ベトナム）、ソウル、ロシア、ブラジル、ハノイ（ベトナム）の五紫紺会へ会旗を授与した。世界各国・地域で活躍する校友らで組織される「海外紫紺会」は、これで計十六団体となった（校友会大韓民国支部、台湾支部は除く）。

●図書館書評コンテスト

齊藤さん（文1）が最優秀賞

明大生が書評を競う「第五回明治大学図

書館書評コンテスト」の表彰式が一月三十一日、駿河台キャンパス・中央図書館で催され、最優秀賞を獲得した齊藤未来さん（文1）をはじめ、十二人が表彰を受けた。

このコンテストは明大生の読書への興味を高め、積極的な図書館利用を促すことを目的に、二〇一〇年度より開催。参加者は本学図書館が所蔵する図書から一冊（ジャンル自由）を選び、八百字以上千二百字以内を目安に作品を評価・批評する。

●明治大学都市政策フォーラム

これからの東京を考えるシンポを開催

ガバナンス研究科（公共政策大学院）の修了生で組織する「明治大学都市政策フォーラム」は一月二十日、日本交通学会などと協力し、「東京オリンピック・パラリンピックに向けて～これからの東京を考える～」と題するシンポジウムを駿河台キャンパス・リバティホールで開催。約百八十人が来場し、国内外の有識者による講演やパネルディスカッションに耳を傾けた。

●国際日本学部

世界は広い！留学生が小学校で交流会

国際日本学部国際交流学生委員会は二月十二日、東京都中野区の区立緑野小学校を訪れ、留学生と小学生との交流会を開催した。

これは、学生有志で組織された国際交流学生委員会が緑野小学校と共同で、国際色豊かな国際日本学部の留学生と小学生との異文化交流を目的に企画したもの。昨年に引き続き二回目となった今回は、アメリカ、フランス、オーストリア、ベトナム、中国、韓国、台湾、香港からの留学生十二人が参加し、緑野小学校六年生七十八人と交流を深めた。

●首都直下地震に備えを

明大生、教職員対象に防災講座ワークショップ

シヨップを開催

駿河台ボランテニアセンターは一月十三日と二十日、明大生、教職員を対象にした防災講座・ワークショップを駿河台キャンパスで開催した。今後三十年以内に七〇%以上の確率で発生すると予想されているマグニチュード7クラスの「首都直下地震」に備え、学生・教職員の防災意識を高めることが目的。

十三日に開催された防災講座では「首都直下地震にあつたら：どうする？」をテーマに、中林一樹特任教授（政治経済学研究所）が首都直下地震の概要、建物や人的被害の想定、震災対策などについて解説。命を守る十項目として「寝室には家具を置かない」「各部屋に内履き（スニーカー）を準備する」など、身近でできる震災対策を紹介した。

●体同連・女子ラクロス部 創部初の日本一&三冠!

大学王者の体同連(体育同好会連合会)女子ラクロス部は昨年十二月二十一日、江戸川区陸上競技場で行われたラクロス全日本選手権の決勝で、クラブチーム王者「NLCS CHERZO」を8-7の接戦の末に下し優勝。一九八八年の創部以来初の「日本一」に輝くとともに、今年度は関東学生リーグ戦、大学選手権、全日本選手権を制覇し、「三冠」の偉業を成し遂げた。なお、全日本選手権の大会 MVP には松本理沙選手(文3)が選出。チームの快挙に花を添えた。

●スケート部アイスホッケー部門 二十年ぶり三冠達成!

体育会スケート部(アイスホッケー部門)は一月九日、日本学生氷上競技選手権の決勝で東洋大を接戦の末3-2で下し、四年ぶり二十九度目の大学日本一に輝いた。春の関東大学選手権、秋の関東大学リーグ戦も制していた明大は、一九九四年度以来二十年ぶりとなる悲願の三冠を達成した。

●男子スポーツクライミング部 第一回インカレ総合優勝!

男子スポーツクライミング部ロックオンロック(明大公認サークル)は十二月七日、

「第一回日本学生スポーツクライミング対校選手権大会」(会場:明治大学和泉キャンパス総合体育館)で、ボルダリング種目(四人一チーム)一位、スピード種目(二人一チーム)三位に入り、創部三年目にして総合優勝を果たした。

◆駿台トピックス

●国際大学生をバスツアーで 駿河台・和泉キャンパスに招待

連合駿台会が協力して青柳勝栄副会長を中心に二〇一四年十二月六日、二年前から系列法人となった学校法人国際大学(新潟県南魚沼市)の学生四十五人を貸し切りバスで駿河台と和泉の両キャンパス見学ツアーに招待、ESSメンバーと交流しました。

国際大学理事でもある青柳副会長とともに新潟を出発した学生二行のバス道中は和気あいあいでした。約三時間のバスの中も、それぞれが自己紹介し合い、ジョークを飛ばしながら、あつという間に東京に到着、厳しい研修の合間の楽しい一日となったようです。

見学そして交流スケジュールは、三グループに分かれて、まず午前が駿河台キャンパスでガイドDVD上映の後、グローバルフロントやリバイタワー、学生食堂でランチ、さらには岸本辰雄記念ホールなどで記念撮影、午後は和泉に入って図書館や明大マートなど

と、約六時間たっぷりと見て聞いて話してと、誰もがどん欲でした。

国際大学(International University of Japan IJU)は一九八二年に創立、日本で初めての英語による授業と九月入学制度を採用入れた大学院です。すでに百十五カ国・三千六百人以上の修了生が世界各国で活躍しています。現在も四十カ国以上の在学生がまさに風俗習慣などの異文化の枠を超えて学び合



コミュニケーション力をみがいしています。

今回のツアーはまさにその国際大学ポリシーにあふれ、明治大学や日本、さらには日常の素朴な疑問まで質問や感想がポンポン飛び出しました。もちろん、すべては英語です。これに、往年のESS委員長でもある青柳副会長や現役の津山亮太さん(四年)や合原宗一郎さん(二年)などが、これまた得意の英語で交流、交歓して、まさしくグローバル色いっぱいツアーとなりました。

「明大の学生と交流できて良かった」「雰囲気よかった」「とてもリフレッシュできた」などと参加者のフィードバックは大好評。さらには、「もともともつといろいろなところを見たかった」「五分でも十分でも授業に参加しましたかった」などという今後への要望も相次ぎました。そして、「将来は国際大学と明治大学の学生がジョイント・プロジェクト、それに一緒にレクチャー参加などしたら面白いと思う」などという積極的な提案もありました。

青柳副会長は、「まずは第一回目でしたが、今後はさらに内容を充実、改良していかなければと思います。そして、援助していただいた大学や会に心から感謝申し上げます」と次回に意欲満々でした。

◆駿台懇話会出席者

○明治大学ご招待者

日高憲三、福宮賢一、飯田和人、三木一郎、松本隆栄、大木幸子、清水秀夫、中村義幸、伊藤光、山本昌弘、長尾進、須田努、高山茂樹、小野寺幸子、小笠原渉、永代達三、飯塚浩司、富樫芳勝、秋谷紀男、居駒永幸、石田祥子、須藤功、宮城善一、下坂陽男、矢ヶ崎淳子、辻村みよ子、古谷英二(敬称略)

○会員出席者

青木孝、青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、坏昭二、浅井宏、有賀隆治、石川かおり、石橋良一、伊原敏雄、上西紘治、宇川和夫、潮田伊佐夫、宇田川雅弘、大原幸男、大前実之、大山卓良、荻部彰夫、河合秀二郎、河村博、清野明男、小柴和弘、小島清治、兒玉康資、小谷野正道、小山修、根田哲雄、斉藤春夫、齋藤柳光、笹田学、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、鈴木紘一、鈴木俊光、関根均、高澤徹、武田宣夫、田村駿、辻嘉右工門、天童美德、徳丸平太郎、中川敏洋、長堀守弘、中村豊、西尾勝治、西山武夫、橋口隆、橋口隆二、長谷川進一、原田榮、平川清、比良田幸雄、弘中徹、福田和彦、藤代耕一、藤巻伴英、眞壁八郎、松崎優子、摩尼和夫、向井眞一、山上雅隆、山口政廣、山田朝彦、吉田均

【編集後記】

まずもって二〇一五年度一般人試の志願者が九年連続十万人の万台を超えたことは大変喜ばしいことであり、昨今の大学が選ばれる時代の中では大健闘だと思います。この社会的評価は大学側の諸施策、努力はもちろんのこと、社会でご活躍されている校友の皆様一人ひとりが努力を積み重ねて来られた評価の賜物です。また、この難関を突破された学生には、明治スピリットを胸に多くの友人をつくり、個性を磨いて社会に貢献できる人間に育って欲しいと願っています。

一方、この数年私立大学の約半分が定員割れという大学戦国時代で生き残りをかけ、各大学が知恵を絞っている中で注目されるのが、昨秋文科省が発表した「スーパーグローバル大学(SGU)」に選ばれたことです。これは世界で通用する研究や国際化を積極的に進めている大学を重点的に支援し最終的には日本全体の国際競争力の強化を目指すものです。その原動力となるグローバル人材の育成を託された勝ち組でもあります。

この構想のテーマは「世界へ! MEIJI 8000」で、学生の主体的な学びを育み、未来開拓力に優れた人材育成で全学的な推進体制で取組まれております。その中で特述したいのが、十年後には二人に一人が単位修得の海外留学を可能にする一方で、外国人留学生の受入れを現在の千六百人から四千人にすることであり、この目標は私大ではトップクラスです。現在の留学生出身国は中国、韓国、台湾、マレーシアが大半を占め世界三十八カ国から来ています。外国語授業科目の倍増、混住型学生宿舎の開設などはもとより、何と言っても学生たちが国内外で異文化体験を可能にするし、明大に学ぶ留学生が増えることで学生同士が友だちになり、日本を理解し、好きになってくれる絶好のチャンスでもあります。世界に発信し誇れる大学を目指すためにも、大変インパクトのある事業であると確信しています。

今後の熾烈な大学間競争を勝ち抜いて行くためにも、皆様の力強いご支援、ご協力を心からお願いたします。(有賀 隆治)